

琉球大学学術リポジトリ

児童のストレスに影響を及ぼす要因についての検討： ソーシャルサポート、対処行動

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学教育学部 公開日: 2007-09-15 キーワード (Ja): キーワード (En): social support, stress, alleviation effects, coping 作成者: 嘉数, 朝子, 砂川, 裕子, 井上, 厚, Kakazu, Tomoko, Sunagawa, Yuko, Inoue, Atushi メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/1853

児童のストレスに影響を及ぼす要因についての検討 — ソーシャルサポート、対処行動 —

嘉数朝子* 砂川裕子** 井上 厚***

A Study on Factors of Affecting Stress in Elementary School Children — Social Support, Coping Style —

Tomoko KAKAZU Yuko SUNAGAWA Atushi INOUE

Summary

The present study was to investigate the coping strategies in elementary school children, and relationship between stress responses and social support. The survey about coping, and subjective symptoms and perceived social support were conducted with 3ed and 5th grade elementary school children. We also investigated the difference of situation, study and friend. The results showed that: 1) Children frequently used avoidance and emotional support. 2) Boys frequently used aggressive individual coping and avoidance, girls used social cooperation. 3) Children who frequently used avoidance and emotional support showed the highest scores of stress responses. 4) The social support alleviated stress more effectively in girls than in boys. 5) The 3ed grade children had high scores on each coping than 5th grade children. 6) The domain specific effects were found. There are significant deference between study and friend situation. Children are coping differently by situation.

key word: social support, stress, alleviation effects, coping

1. 目的

ストレスに関する研究を概観すると、これまでの研究によって、ソーシャルサポートとストレスの関係、対処行動とストレスの関係、ストレス状況の差異によるストレス反応などが検討されてきた。つまり、これまでの研究をLazarusのシステム理論に沿ってまとめてみると、「因果関係先行条件」と「長期的効果」としてのストレス反応の関係、または「媒介過程」と「長期的効果」としてのストレス反応の検討がなされてきたことになる。

しかし、ストレス反応表出までの過程は、様々な要因からなり、相互に影響しあっているため、その解明には、理論に従った包括的な検討が必要となってくる。

そこで本研究では、ストレス反応表出までの過

程を、「因果関係先行条件」、「媒介過程」、「長期的効果」と追って検討することを主な目的とする。本研究では図1に示す通り、「因果関係先行条件」としてソーシャルサポートを、「媒介過程」として対処行動を、「長期的効果」としてストレス反応を要因として検討を行う。

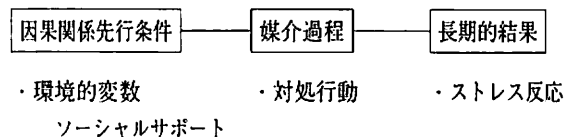


図1 本研究モデル

*学校心理学教室

**那覇市立小緑小学校

***広島女学院大学生生活科学部

また、岡安らの研究結果(1992)により、ストレスラーによってストレス反応の現れ方に差がみられることが分かっており、ストレスラーを明確にすることの重要性が明らかになっている。そこで本研究では、ストレス反応表出までの一連の過程を検討する際、長根らの研究結果(1991)によって、児童にとって代表的な学校ストレスラー場面として抽出された、友人関係場面をストレスラーに設定した。

ソーシャルサポートについては、その量だけではなく、誰からどのようなサポートを得ていると認知しているかという「対象源」、「機能的側面」の両方からのアプローチを行う必要があると思われる。

また、対処行動についても、子どもはもともと成人や社会的環境に依存していることから、対処行動の指標は慎重に選択する必要があると思われる。そこで、対処行動の調査には Lopez & Little (1995) によって開発された尺度で、子どもの対処行動を活動性(直接的 対 間接的)と社会性(向社会的 対 反社会的)の2次元により分類可能とした BISC ; Behavioral Inventory of Strategic Control を用いる。なお日本では、嘉数ら(1998)によって日本語版BISCが作成され、BISC妥当性と信頼性が確認されている。そこで本研究では、彼女らの作成した友人関係対処行動調査尺度BISCを使用する。

あわせて、先行研究の中でソーシャルサポートの認知には性差が得られていることから、ソーシャルサポートと対処行動がストレス反応に及ぼす効果についての性差、学年差についても検討する。

2. 方法

調査対象：

沖縄県内公立Y小学校

3年生121名(男児62、女児59)、

5年生97名(男児44、女児53) 計218名

沖縄県内公立J小学校

3年生 90名(男児43、女児47)、

5年生126名(男児62、女児64)計216名、

総計434名

調査期日：1997年11月下旬～12月上旬

調査内容：

① 対処行動調査尺度BISC12項目

嘉数ら(1998)作成の日本語版を使用した。

[回避]、[協力要請]、[情緒的援助希求]、[個人主義的対処]、[他者依存的対処]、[積極的対処]からなっており、各カテゴリーに2項目ずつ、合計12項目で構成されている。

対人関係場面の設定については、児童にとって代表的な困難な場面である「ケンカ場面」を設定した。「友だちとケンカしたとき、あなたならどうしますか。また、どう感じますか。」という困難な状況に置かれたとき、どのような対処行動を用いるかを、各項目について「いつもそうです」から「ほとんどちがいます」の4件法で回答を求めた。

以下に、対人関係対処行動調査尺度BISCの項目を示す。

—回避—

- ・(ケンカしたことを)気にしません。
- ・(ケンカしたことについて)心配しないようにします。

—協力要請—

- ・だれかに、「あなただったらどうする」と聞きます。
- ・だれかに助けてもらって、うまくいくようにします。

—情緒的援助希求—

- ・家族と一緒にテレビを見たりして、(ケンカしたことを)考えないようにします。
- ・私をなぐさめてくれる人をさがします。

—個人主義的対処—

- ・他の人の言うことはあてにならないので、自分でなんとかします。
- ・だれかに助けてもらうことはきらいなので、自分でなんとかします。

—他者依存的対処—

- ・だれかがうまくやってくれるまで待ちます。
- ・「自分は言えないから」と言って、代わりにだれかにあやまってもらいます。

—積極的対処—

- ・「ごめんね」と自分からあやまります。
- ・ケンカをした理由を考えて、そのようにならないように気をつけます。

② ソーシャルサポート調査尺度

中澤（1996）の作成したソーシャルサポート尺度を用いた。「情緒的サポート」と「情報的サポート」で構成されている。サポート源としては、「お父さん」、「お母さん」、「きょうだい」、「友だち」、「先生」、の5対象を設定した。項目数は、5対象源×6項目=30項目であった。各項目に記載されたサポートを、設定された情報源からどの程度得ていると思うかを、「してくれる」から「してくれない」の4段階評定で回答を求めた。

③ ストレス反応調査尺度

嶋田・戸ヶ崎・坂野(1994)の作成した児童版ストレス反応調査尺度を用いた。本尺度は、4因子からなっており、各因子について5項目ずつ、合計20項目であった。第1因子は[身体反応]、第2因子は[抑うつ・不安感情]、第3因子は[不機嫌・怒り感情]、第4因子は[無気力]であった。各項目について自分がどの程度あてはまるかを、「よくあてはまる」から「全然あてはまらない」の4段階評定で回答を求めた。

調査手続き：

各クラス担任を介して、調査用紙を児童に配布し、担任教師の説明・指導のもとに一斉に調査を行った。

3. 結果

(1) ソーシャルサポートについて

① 対象源別ソーシャルサポートの性差および学年差（表1）

対象源別ソーシャルサポートの平均値について、性差および学年差を検討するために、性（男・女）×学年（3・5）の2要因分散分析を行った。

その結果、性の有意な主効果が「父」{|F(1,324)=3.45, p<.10|}、「母」{|F(1,341)=17.32, p<.001|}、「きょうだい」{|F(1,299)=5.80, p<.05|}、「友だち」{|F(1,320)=50.32, p<.001|}、「教師」{|F(1,330)=20.37, p<.001|}の全ての対象において得られた。下位検定の結果、全てのサポート源において、女兒が男児よりも多くのサポートを得ていた。

学年の有意な主効果が得られたのは、「友だち」{|F(1,320)=4.66, p<.05|}、「教師」{|F(1,330)=17.66, p<.001|}においてであった。下位検定の結果、5年生は3年生よりも「友だち」から多くのサポートを得ていると認知しており、3年生は5年生よりも「教師」から多くのサポートを得ていると認知していた。性と学年の有意な交互作用は認められなかった。

表1 対象源別ソーシャルサポートの性差および学年差の検定

	性		学 年		交互作用
父	男 17.02 (4.89)	F = 3.45*	3年 17.50 (4.97)	F = .003	F = .891
	女 18.01 (4.60)	男<女	5年 17.57		
母	男 18.43 (4.69)	F = 17.324***	3年 19.24 (4.50)	F = .576	F = .066
	女 20.34 (3.75)	男<女	5年 19.62 (4.16)		
兄弟	男 12.98 (4.69)	F = 35.80*	3年 13.30 (4.97)	F = .163	F = .072
	女 14.35 (4.96)	男<女	5年 14.05 (4.81)		
友だち	男 15.14 (4.79)	F = 50.32***	3年 16.44 (5.15)	F = 4.66*	F = .046
	女 18.72 (4.27)	男<女	5年 17.54 (4.45)	3 < 5	
教師	男 15.50 (5.25)	F = 20.37***	3年 17.84 (4.83)	F = 17.66***	F = .184
	女 17.83 (4.61)	男<女	5年 15.68 (5.05)	3 > 5	

*p<.05 **p<.01 ***p<.001

② 機能別ソーシャルサポートの性差および学年差 (表2)

ソーシャルサポートの機能的側面 (情緒的サポート・情動的サポート) の平均値について、性差および学年差を検討するために、性 (男・女) × 学年 (3・5) の2要因分散分析を行った。

その結果、性の有意な主効果が、情緒的サポート { $F(1,291)=20.26, p<.001$ } と情動的サポート { $F(1,267)=14.68, p<.001$ } の両方で得られた。下位検定の結果、情緒的サポート、情動的サポートの両方で女兒は、男児よりもサポートを多く受けていると認知していた。学年の主効果と性

表2 機能別ソーシャルサポートの性差および学年差の検定

	性		学 年		交互作用
情緒的 S S	男 23.30 (6.79)	F = 50.26***	3年 26.22 (7.10)	F = 1.09	F = .27
	女 28.54 (5.85)	男 < 女	5年 25.71 (6.60)		
情動的 S S	男 55.20 (13.29)	F = 14.68***	3年 57.61 (13.00)	F = .401	F = .047
	女 60.92 (10.47)	男 < 女	5年 58.67 (11.55)		

* $p<.05$ ** $p<.01$ *** $p<.001$

表3 機能別・対象源別ソーシャルサポートについての性差および学年差の検定

	性		学 年		交互作用
SS-J-F	3年 5.497 (1.92)	F = 0.037	男 5.086 (1.88)	F = 17.22	n.s.
	5年 5.489 (1.82)		女 5.885 (1.76)	***	
SS-J-M	5年 6.209 (1.85)	F = 0.09	男 5.743 (1.92)	F = 32.71	n.s.
	5年 6.296 (1.68)		女 6.734 (1.45)	***	
SS-J-B	3年 4.204 (1.82)	F = 30.65	男 3.939 (1.68)	F = 4.043	n.s.
	5年 4.070 (1.76)		女 4.322 (1.87)	*	
SS-J-FR	3年 5.197 (1.90)	F = 0.054	男 4.518 (1.77)	F = 47.674	n.s.
	5年 5.202 (1.89)		女 5.823 (1.79)	***	
SS-JH-T	3年 5.633 (1.95)	F = 22.437	男 4.638 (2.07)	F = 28.621	n.s.
	5年 4.725 (2.03)	***	女 5.676 (1.88)	***	
SS-JH-F	3年 12.102 (3.48)	F = 0.006	男 12.019 (3.49)	F = 0.142	n.s.
	5年 12.079 (3.23)		女 12.156 (3.21)		
SS-JH-M	3年 13.065 (3.02)	F = 1.015	男 12.807 (3.13)	F = 7.263	n.s.
	5年 13.389 (2.77)		女 13.637 (2.60)	***	
SS-JH-B	3年 9.196 (3.53)	F = 4.050	男 9.102 (3.37)	F = 6.360	n.s.
	5年 9.994 (3.45)	*	女 10.097 (3.56)	**	
SS-JH-FR	3年 11.252 (3.48)	F = 10.86	男 10.727 (3.39)	F = 40.246	n.s.
	5年 12.354 (3.00)	**	女 12.847 (2.81)	***	
SS-JH-T	3年 12.299 (3.13)	F = 14.282	男 11.068 (3.50)	F = 10.636	n.s.
	5年 11.017 (3.33)	***	女 12.165 (3.00)	**	

* $p<.05$ ** $p<.01$ *** $p<.001$

J; 情緒的サポート

JH; 情動的サポート

F; 父、M; 母、B; きょうだい、FR; 友だち T; 教師

と学年の有意な交互作用は認められなかった。

③ 機能別の対象源別ソーシャルサポートの性差および学年差 (表3)

機能別の対象源別ソーシャルサポートの平均値について、性差および学年差を検討するために、性(男・女)×学年(3・5)の2要因分散分析を行った。

その結果、性の有意な主効果が「父親」からの「情動的サポート」を除く全てにおいて認められた。「父親」からの「情動的サポート」 $\{F(1,357)=17.221, p<.001\}$ 、「母親」からの「情動的サポート」 $\{F(1,386)=32.714, p<.001\}$ 、「きょうだい」からの「情動的サポート」 $\{F(1,334)=4.043, p<.05\}$ 、「友だち」からの「情動的サポート」 $\{F(1,356)=47.674, p<.001\}$ 、「教師」からの「情動的サポート」 $\{F(1,359)=28.621, p<.001\}$ 、「母親」からの「情動的サポート」 $\{F(1,353)=7.263, p<.01\}$ 、「きょうだい」からの「情動的サポート」 $\{F(1,312)=6.360, p<.01\}$ 、「友だち」からの「情動的サポート」 $\{F(1,337)=40.246, p<.001\}$ 、「教師」からの「情動的サポート」 $\{F(1,338)=10.636, p<.01\}$ であった。下位検定の結果、全ての対象で女兒は、男児よりもサポートを受けていると認知していた。

学年の有意な主効果が得られたのは、「情動的サポート」については「教師」からのサポート $\{F(1,359)=22.437, p<.001\}$ のみであった。下位検定の結果3年生は、5年生よりも「教師」からの「情動的サポート」を多く受けていると認知していた。

さらに、「情動的サポート」については、「きょうだい」 $\{F(1,312)=4.050, p<.05\}$ 、「友だち」 $\{F(1,337)=10.856, p<.01\}$ 、「教師」 $\{F(1,338)=14.282, p<.001\}$ において、学年の主効果が得られた。下位検定の結果5年生は、3年生よりも「きょうだい」および「友だち」からの「情動的サポート」を多く受けていると認知しており、逆に3年生は、5年生よりも「教師」からの「情動的サポート」を多く受けていると認知していた。

情動的サポート、情動的サポートの結果をまとめると、高学年になると仲間からのサポートが多くなるが、教師からのサポートが得にくいと認知していることが分かる。

どのサポートについても性と学年の有意な交互作用は認められなかった。

(2) 友人関係対処行動調査尺度BISCについて
友人関係対処行動調査尺度BISC各因子の性差および学年差 (表4)

友人関係対処行動調査尺度BISCの各因子の平均値について、性差および学年差を検討するために、性(男・女)×学年(3・5)の2要因分散分析を行った。

その結果、性の有意な主効果が、「回避」 $\{F(1,425)=5.693, p<.05\}$ 、「協力要請」 $\{F(1,419)=8.667, p<.01\}$ 、「個人主義的対処」 $\{F(1,426)=4.722, p<.05\}$ において認められた。下位検定の結果、男児は女児よりも「回避」および「個人主義的対処」を多く用い、女児は男児よりも「協力要請」を多く用いていた。

さらに、学年の有意な主効果が、「回避」 $\{F(1,425)=12.286, p<.001\}$ 、「協力要請」 $\{F(1,419)=4.990, p<.05\}$ 、「情動的援助希求」 $\{F(1,426)=30.267, p<.001\}$ 、「個人主義的対処」 $\{F(1,426)=20.023, p<.001\}$ 、「他者利用的対処」 $\{F(1,421)=5.285, p<.05\}$ 、「積極的対処」 $\{F(1,430)=15.069, p<.001\}$ の全てにおいて得られた。下位検定の結果、3年生は、5年生よりも全ての対処行動を多く使用していた。

どの対処行動についても性と学年の有意な交互作用は認められなかった。

(3) ストレス反応について
ストレス反応各因子の性差および学年差 (表5)
ストレス反応における各下位因子の平均値について、性差および学年差を検討するために、性(男・女)×学年(3・5)の2要因分散分析を行った。

その結果、「抑うつ・不安」反応において、性の有意な主効果 $\{F(1,419)=7.98, p<.01\}$ 、および学年の有意な主効果 $\{F(1,419)=4.27, p<.05\}$ が得られた。下位検定の結果、女児は男児よりも「抑うつ・不安」が高く、3年生は5年生よりも「抑うつ・不安」が高いことが分かった。性と学年の有意な交互作用は認められなかった。

表4 対処行動についての性差および学年差の検定

	学 年		性		交互作用		
回避	3年	8.259 (2.94)	F = 12.286 ***	男	8.101 (2.96)	F = 5.693 *	n.s.
	5年	7.309 (2.61)		女	7.447 (2.62)		
協力要請	3年	7.078 (2.72)	F = 4.990 *	男	6.464 (2.49)	F = 8.67 **	n.s.
	5年	6.561 (2.23)		女	7.156 (2.45)		
情緒的援助 希求	3年	7.330 (2.56)	F = 30.267 ***	男	6.665 (2.36)	F = 0.060	n.s.
	5年	6.086 (2.10)		女	6.710 (2.46)		
個人主義的 対処	3年	8.524 (3.18)	F = 20.023 ***	男	8.201 (2.92)	F = 4.722 *	n.s.
	5年	7.291 (2.47)		女	7.585 (2.85)		
他者依存的 対処	3年	5.917 (2.17)	F = 5.285 *	男	5.815 (2.09)	F = 1.572	n.s.
	5年	5.479 (1.71)		女	5.574 (1.82)		
積極的対処	3年	10.952 (2.97)	F = 15.069 ***	男	10.261 (2.99)	F = 1.484	n.s.
	5年	9.910 (2.63)		女	10.566 (2.70)		

*p<.05 **p<.01 ***p<.001

表5 ストレス反応の性差および学年差の検定

	性		学 年		交互作用		
身体反応	男	8.72 (3.42)	F = 2.10	3年	9.05 (0.25)	F = .25	F = .79
	女	9.21 (3.51)		5年	8.89 (3.54)		
抑うつ・不安	男	7.61 (2.99)	F = 7.98**	3年	8.35 (3.16)	F = 4.27*	F = 1.37
	女	8.45 (3.25)		男<女	5年		
不機嫌・怒り	男	9.60 (4.09)	F = .37	3年	9.60 (3.71)	F = .38	F = 1.09
	女	9.36 (3.52)		5年	9.37 (3.92)		
無気力	男	9.23 (3.74)	F = 0.73	3年	9.16 (3.33)	F = .17	F = 3.86*
	女	8.94 (3.28)		5年	9.01 (3.69)		
ストレス総計	男	34.51 (11.65)	F = .57	3年	35.26 (10.58)	F = .25	F = 1.15
	女	35.39 (10.83)		5年	34.66 (11.84)		

*p<.05 **p<.01 ***p<.001

(4) 各測度間の関連について

①-1 対象源別ソーシャルサポートと対処行動との関連(表6)

対象源別ソーシャルサポートと各対処行動にどのような関連性があるのか検討するために、これらの相関係数を算出した。

有意な相関係数が得られたのは「父」で2個、「母」で3個、「きょうだい」で1個、「友だち」で5個、「教師」で3個であった。

詳細に検討してみると、「友だち」からのサポー

トは、6対処行動中「他者依存的対処」を除く、5対処行動との間で、有意な相関が得られた。このことから、「友だち」からのサポートの有無が、対処行動の生起に関連していることが推測される。「友だち」からのサポートと「協力要請」(r=.251)、「情緒的援助希求」(r=.175)、「積極的対処」(r=.209)との間には、有意な正の相関(p<.05~p<.001)が得られ、「友だち」からのサポートが得られていると認知する者ほど、「協力要請」、「情緒的援助希求」、「積極的対処」など

表6 対象源別ソーシャルサポートと対処行動との相関

性	回避	協力	情緒的	個人主義	他者依存	積極的
父	-.075	.170**	.064	-.060	-.086	.113*
母	-.110*	.217***	.047	-.102	-.081	.185***
兄弟	-.019	.105	.126*	-.081	-.090	.055
友だち	-.131*	.251***	.175**	-.115*	-.040	.209***
教師	.011	.265***	.226***	-.063	-.012	.209***
トータル	-.099	.251***	.155*	-.125*	-.070	.226***

* $p < .05$ ** $p < .01$ *** $p < .001$

表7 ソーシャルサポートの機能的側面と対処行動との相関

	回避	協力	情緒的	個人主義	他者依存	積極的
情緒的SS	-.016	.267***	.200***	-.069	-.007	.245***
情動的SS	-.128*	.224***	.115	-.134*	-.125*	.158**
SSトータル	-.099	.251***	.155*	-.125*	-.070	.226***

* $p < .05$ ** $p < .01$ *** $p < .001$

の接近的な対処をとることを示唆する。一方、「回避」($r = -.131$)、「個人主義的対処」($r = -.115$)との間には、有意な負の相関 ($p < .05$) が得られた。つまり、「友だち」からのサポートが得られると認知できない者ほど、「回避」や「個人主義的対処」などの回避的ネガティブな対処行動をとるといえる。

「母」からのサポートと「回避」($r = -.110$)との間には、低い有意な負の相関 ($p < .05$) が得られた。つまり、「母」からのサポートが得られないと認知する者ほど、対処行動として「回避」をとることが明らかになった。

「教師」からのサポートと「協力要請」($r = .265$)、「情緒的援助希求」($r = .226$)、「積極的対処」($r = .209$)との間には、有意な正の相関 ($p < .001$) が得られた。このことは「教師」からのサポートが得られると認知している者、つまり、教師との関係がうまくいっていると認知している者ほど、「社会的協力」や「情緒的支援」、「積極的対処」など接近的な対処行動をとるといえる。

さらに、対処行動のタイプごとにみても、「回避」、「個人主義的対処」および「他者依存的対処」は、全てのサポート源との間に負の相関係

数が得られた。また、「協力要請」、「情緒的援助希求」および「積極的対処」は、全てのサポート源と正の相関関係を示した。Lopez & Little (1995)によるコーピングの2元軸モデルによると、「協力要請」、「情緒的援助希求」は、「向社会的-直接的」次元に分類される。BISCにおける「積極的対処」の項目は、その内容から、同様に「向社会的-直接的」次元にあてはまるものと思われる。つまり、ソーシャルサポートが得られていると認知している者ほど、「向社会的-直接的」対処を用いることが明らかになった。

①-2 ソーシャルサポートの機能的側面と対処行動との関連 (表7)

ソーシャルサポートの機能的側面(情緒的機能・情動的機能)と各対処行動との間にどのような関連性があるのかを検討するために、これらの相関係数を算出した。

「情緒的サポート」、「情動的サポート」および「サポート総計」と対処行動の「協力要請」との間の相関係数は、それぞれ $r = .267$ 、 $r = .224$ 、 $r = .251$ という有意な正の相関係数が得られた (いずれも $p < .001$)。

さらに、「情緒的サポート」および「サポート

総計」と対処行動の「情緒的援助希求」の間には、 $r = .200$ ($p < .001$)、 $r = .155$ ($p < .005$) という有意な正の相関係数が得られた。

「情緒的支持」、「情報的支持」および「サポート総計」と対処行動の「積極的対処」との間には、 $r = .245$ ($p < .001$)、 $r = .158$ ($p < .01$)、 $r = .226$ ($p < .001$) という有意な正の相関係数が得られた。

「情報的支持」と対処行動の「回避」、「個人主義的対処」、「他者依存的対処」と間には、それぞれ $r = -.128$ 、 $r = -.134$ 、 $r = -.125$ (いずれも $p < .05$) の有意な負の相関係数が得られた。つまり、「情報的なサポート」が得られると認知している者ほど、「回避」、「個人主義的対処」、「他者依存的対処」などの対処行動をとらないといえる。言い換えると、「情報的支持」が少ないと認知する者は、「回避」か「個人主義的対処」か「他者依存的対処」などの対処行動をとるといえる。

①-3 機能別、対象源別のソーシャルサポートと各対処行動の関連 (表8)

機能別、対象源別のソーシャルサポートと各対処行動との間にどのような関連があるのか検討するために、これらの相関係数を算出した。

対処行動の「回避」は、「母親」($r = -.133$) お

よび「友だち」($r = -.141$) からの「情報的支持」との間に、有意な負の相関係数 ($p < .05$) が得られた。

対処行動の「協力要請」は、「きょうだい」からの「情報的支持」を除いた全てのサポート源との間に、有意な正の相関が得られた ($r = .115 \sim r = .272$)。

対処行動の「情緒的援助希求」は、「きょうだい」、「友だち」および「教師」からの「情緒的支持」との間に、さらに、「友だち」および「教師」からの「情報的支持」との間に有意な正の相関係数が得られた ($r = .158 \sim r = .228$)。

対処行動の「個人主義的対処」は、「母親」($r = -.106$) および「友だち」($r = -.116$) からの「情報的支持」との間に、有意な負の相関係数が得られた。

対処行動の「他者依存的対処」は、「父親」($r = -.113$) および「きょうだい」($r = -.137$) からの「情報的支持」との間に、有意な負の相関係数が得られた。

対処行動の「積極的対処」は、「きょうだい」からの「情緒的支持」、「父親」および「きょうだい」からの「情報的支持」を除いた全てのサポート源との間で、有意な正の相関が得られた ($r = .132 \sim .209$)。

表8 機能別・対象源別ソーシャルサポートと対処行動との相関

	回避	協力	情緒的	個人主義	他者依存	積極的
J-F	-.030	.181***	.062	-.031	-.015	.134*
J-M	-.036	.170**	.047	-.059	-.068	.198***
J-B	.057	.137*	.185***	-.013	.001	.093
J-FR	-.075	.187***	.175**	-.092	-.017	.185***
J-T	.006	.272***	.200***	-.094	.008	.209***
JH-F	-.044	.155*	.050	-.062	-.113*	.076
JH-M	-.133*	.192***	.022	-.106*	-.102	.132*
JH-B	-.061	.108	0.84	-.095	-.137*	.025
JH-FR	-.141*	.252***	.158***	-.166*	-.061	.202***
JH-T	.036	.249***	.228***	-.031	.031	.188***

* $p < .05$ ** $p < .01$ *** $p < .001$

J; 情緒的支持

JH; 情報的支持

F; 父、M; 母、B; きょうだい、FR; 友だち T; 教師

表9 各対処行動とストレス反応との相関

	回避	協力	情緒的	個人主義	他者依存	積極的
身体的反応	.031	.117*	.165**	.097*	.103*	.084
抑うつ・不安	.086	.208***	.183***	.081	.157**	.101*
不機嫌・怒り	.174***	.153**	.132**	.124*	.122*	.015
無気力反応	.071	.094	.148**	.055	.129**	-.043
ストレス総計	.011	.166**	.188***	.108*	.151**	.040

*p<.05 **p<.01 ***p<.001

つまりまとめると①-2の結果と同様に、サポートが得られると認知する者は、「協力要請」「情緒的援助希求」「積極的対処」を用いるといえる。逆にサポートが得られないと、「回避」「個人主義的対処」「他者依存的対処」を用いるといえる。

② 各対処行動とストレス反応の関連 (表13)

各対処行動とストレス反応との間にどのような関連があるかを検討するために、これらの相関係数を算出した。

対処行動の「協力要請」、「情緒的援助希求」、「他者依存的対処」得点と「ストレス総計」との間に、それぞれ $r=.166$ 、 $r=.188$ 、 $r=.151$ (いずれも $p<.001$)の正の有意な相関が得られた。「社会的協力」、「情緒的援助」、「他者依存的対処」などの対処は、他者との接触が必要な対処と考えられる。それらの対処とストレス反応の間には正相関が得られたことから、他者との接触が必要な対処行動によってストレスが増大されていることが示唆された。

③-1 対象源別ソーシャルサポートとストレス反応の関連 (表9)

対象源別ソーシャルサポートとストレス反応の間にどのような関連性があるかを検討するために、これらの相関係数を算出した。

まず、「父親」からのサポートは、ストレス反応の「抑うつ・不安」($r=.113$)、および「不機嫌・怒り」($r=.139$)、の間に、有意な負の相関係数が得られた。

さらに、「母親」からのサポートは、ストレス「無気力」の間に、有意な負の相関係数が得られた ($r=.148$)。

「教師」からのサポートは、ストレス反応の

「不機嫌・怒り」($r=.174$)、およびストレス「無気力」($r=.116$)との間に、有意な負の相関係数が得られた。

これらのことから、ソーシャルサポートとストレス反応との間は、負の相関関係にあり、ソーシャルサポートが得られると認知している者ほど、ストレスが低いといえ、サポートの軽減効果が示唆された。

③-2 機能別ソーシャルサポートとストレス反応の関係 (表10)

機能別ソーシャルサポートの量とストレス反応の間にどのような関連性があるかを検討するために、これらの相関係数を算出した。

「情緒的サポート」と、ストレス反応の「不機嫌・怒り」($r=.154$)および「無気力」($r=.119$)、との間に、有意な負の相関係数が得られた。

「情動的サポート」と、ストレス反応の「不機嫌・怒り」($r=.171$)および「無気力」($r=.127$)、との間にも、有意な負の相関係数が得られた。

情緒的サポート、情動的サポートどちらも、ストレス反応の「不機嫌・怒り」「無気力反応」との間に負の相関係数が得られた。

表10 機能別ソーシャルサポートとストレス反応との相関

	情緒的機能	情動的機能	トータル
身体的反応	-.013	-.037	-.024
抑うつ不安	.073	-.038	.049
不機嫌怒り	-.154*	-.171**	-.175**
無気力反応	-.119*	-.127*	-.135*
トータル	-.065	-.127*	-.106

*p<.05 **p<.01 ***p<.001

表11 機能別・対象源別ソーシャルサポートと
ストレス反応との相関

	身体反応	抑鬱・ 不安	不機嫌 怒り	無気力	ストレス 計
J-F	-.014	-.069	-.119*	-.188***	-.101
J-M	.003	.011	-.067	-.117*	-.046
J-B	.010	.095	-.051	-.033	-.007
J-FR	-.042	.126*	-.104	-.066	-.017
J-T	-.018	.088	-.157***	-.100	-.078
JH-F	-.022	-.121*	-.083	-.093	-0.79
JH-M	-.033	-.059	-.109*	-.152**	-.097
JH-B	-.022	-.028	-.081	-.104	-.097
JH-FR	-.015	.069	-.091	-.036	-.039
JH-T	.009	.049	0.141*	-.086	-.074

*p<.05 **p<.01 ***p<.001

J; 情緒的サポート

JH; 情動的サポート

F; 父、M; 母、B; きょうだい、FR; 友だち T; 教師

③-3 機能別、対象源別ソーシャルサポートと
ストレス反応の関連 (表11)

機能別、対象源別ソーシャルサポートとストレス反応の間にどのような関連があるのかを検討するために、これらの相関係数を算出した。

ストレス反応の「抑うつ・不安」は、「友だち」(r=.126)からの「情緒的サポート」、「父親」(r=-.121)からの「情動的サポート」との間に、低い有意な相関係数が得られた。

ストレス反応の「不機嫌・怒り」は、「父親」および「教師」からの「情緒的サポート」と、「母親」および「教師」からの「情動的サポート」との間に、有意な負の相関係数が得られた (r=-.109~r=-.157)。

ストレス反応の「無気力」は、「父親」(r=-.188)および「母親」(r=-.117)からの「情緒的サポート」と、「母親」(r=-.152)からの「情動的サポート」との間に、有意な負の相関係数が得られた。

③-4 男児における、機能別、対象源別ソーシャルサポートとストレス反応の関連 (表12)

男児における、機能別、対象源別ソーシャルサポートとストレス反応の間にどのような関連があ

るのかを検討するために、これらの相関係数を算出した。

ストレス反応の「不機嫌・怒り」は、「父親」からの「情緒的サポート」との間に、低い有意な負の相関係数が得られた (r=-.157)。

表12 男児における機能別・対象源別ソーシャルサポートとストレス反応との相関

	身体反応	抑鬱・ 不安	不機嫌 怒り	無気力	ストレス 計
J-F	-.037	-.046	-.157*	-.117	-.096
J-M	-.018	.030	-.071	-.062	-.042
J-B	-.061	.113	-.074	.019	-.029
J-FR	-.044	.113	-.124	-.051	-.015
J-T	-.045	.150	-.108	.010	.021
JH-F	-.035	-.089	-.136	-.079	-.083
JH-M	.018	-.049	-.150	-.114	-0.87
JH-B	-.041	-.068	-.159	-.130	-.135
JH-FR	-.027	.073	-.083	-.136	-.135
JH-T	.067	.112	-.099	-.038	-.027

*p<.05 **p<.01 ***p<.001

J; 情緒的サポート

JH; 情動的サポート

F; 父、M; 母、B; きょうだい、FR; 友だち T; 教師

表13 女児における機能別・対象源別ソーシャルサポートとストレス反応との相関

	身体反応	抑鬱・ 不安	不機嫌 怒り	無気力	ストレス 計
J-F	-.028	-.161*	-.058	-.260**	-.129
J-M	-.029	-.104	-.030	-.167*	-.082
J-B	.045	.052	-.030	-.080	-.008
J-FR	-.078	.074	-.059	-.042	-.032
J-T	-.125	-.037	-.220**	-.206**	-.221**
JH-F	-.016	-.168*	-.020	-.114	-.080
JH-M	-.112	-.117	-.038	-.187*	-.121
JH-B	-.039	-.045	-.010	-.087	-.089
JH-FR	-.040	-.010	-.073	.001	-.061
JH-T	-.078	-.065	-.192*	-.135	-.175*

*p<.05 **p<.01 ***p<.001

J; 情緒的サポート

JH; 情動的サポート

F; 父、M; 母、B; きょうだい、FR; 友だち T; 教師

その他の、有意な相関係数は得られなかった。
 ③-5 女兒における、機能別、対象源別ソーシャルサポートとストレス反応の関連 (表13)

女兒における、機能別、対象源別ソーシャルサポートとストレス反応の間にどのような関連があるのかを検討するために、これらの相関係数を算出した。

ストレス反応の「抑うつ・不安」は、「父親」からの「情緒的サポート」($r = -.161$) および「情動的サポート」($r = -.168$) との間に、低い有意な負の相関係数が得られた。

ストレス反応の「不機嫌・怒り」は、「教師」からの「情緒的サポート」($r = -.220$) および「情動的サポート」($r = -.192$) との間に、有意な負の相関係数が得られた。

ストレス反応の「無気力」は、「父親」($r = -.260$)、「母親」($r = -.167$) および「教師」($r = -.206$) からの「情緒的サポート」と、「母親」($r = -.187$) からの「情動的サポート」との間に、有意な負の相関係数が得られた。

「ストレス総計」は、「教師」からの「情緒的サポート」との間に、有意な負の相関係数が得られた ($r = -.221$)。

男女別の機能別、対象源別ソーシャルサポートとストレス反応の関連を比較したところ、明らかに違いが見られた。女兒は男児よりも、サポートとストレスの関連が強く、特に、「教師」からの「情緒的サポート」がストレス軽減に効果が顕著だった。

④-1 ストレス反応に影響を与える要因について (表14)

ストレス反応に影響を与える要因について検討するために、ストレス反応の各因子を基準変数とし、対処行動、情緒的サポート、情動的サポート別のサポート対象源を影響変数として、重回帰分析を行った。その結果、「ストレス総計」($R^2 = .293$) において説明率が有意な傾向にあり、「抑うつ・不安」($R^2 = .317$)、「不機嫌・怒り」($R^2 = .323$)、および「無気力」($R^2 = .314$) において説明率が有意であった。さらに詳細に検討するとストレス反応の「抑うつ・不安」と「きょうだい」からの「情動的サポート」の標準偏回帰係数は $\beta = .175$ であった。ストレス反応の「不機嫌・怒り」

表14 ストレス反応についての重回帰分析

	標準偏回帰係数 (β)				
	ストレス反応				
	ストレス計	身体反応	抑うつ・不安	不機嫌・怒り	無気力
対処行動					
回避	.064	-.016	.042	.133*	.017
協力要請	.117+	.027	.116+	.146*	.061
情緒的援助	.089	.087	.048	.104	.089
個人主義	.010	.030	-.030	-.016	.001
他者依存	.072	.080	.070	.036	.067
積極的対処	.026	.082	.801	-.006	-.032
情緒的サポート					
父	-.205+	-.042	-.163	-.171	-.343***
母	.132	.077	.079	.144	.139
きょうだい	.114	.035	.175+	.027	.159+
友だち	.039	-.080	-.099	-.041	-.048
教師	-.080	-.044	.017	-.093	-.027
情動的サポート					
父	.139	.023	-.050	.116	.245*
母	-.124	-.070	-.070	-.102	-.201*
きょうだい	-.142	-.021	-.108	-.051	-.160+
友だち	-.005	.013	-.017	.012	.097
教師	-.050	.025	.016	-.109	-.066
R ² 説明率	.293+	.196	.317*	.323*	.314*

* $p < .05$ ** $p < .01$ *** $p < .001$

と対処行動の「回避」および「協力要請」の標準偏回帰係数はそれぞれ、 $\beta = .133$ 、 $\beta = .146$ (いずれも $p < .05$) となった。ストレス反応の「無気力」と「父親」からの「情緒的サポート」、「母親」からの「情動的サポート」の標準偏回帰係数はそれぞれ、 $\beta = -.343$ ($p < .001$)、 $\beta = -.201$ ($p < .05$) となった。

つまり、「回避」や「協力要請」などの対処行動は、「不機嫌・怒り」反応を増大させ、「無気力」反応の軽減には「父親」からの「情緒的サポート」、「母親」からの「情動的サポート」が有効であることがわかった。

④-2 男児におけるストレス反応に影響を与える要因について (表15)

男児におけるストレス反応に影響を与える要因

について検討するために、ストレス反応の各因子を基準変数とし、対処行動、情緒的サポート、情動的サポート別のサポート対象源を影響変数として、重回帰分析を行った。

その結果、ストレスのどの下位因子においても説明率は有意でなかった。ストレス反応の「身体反応」($R^2=.277$)においては、説明率が有意な傾向にあった。「抑うつ・不安」では、対処行動の「協力要請」($\beta=.252, p<.05$)と情緒的サポートおよび情動的サポートの「きょうだい」(それぞれ、 $\beta=.297, p<.05, \beta=-.256, p<.05$)との間に有意な偏相関が得られた。ストレス反応の「不機嫌・怒り」では、対処行動の「協力要請」に有意な偏相関が得られた($\beta=.333, p<.05$)。ストレス反応「無気力」では、情緒的サポート

「きょうだい」との間に有意な偏相関が得られた($\beta=.283, p<.05$)。

これらの結果から、男児において、対処行動「協力要請」は、「抑うつ・不安」「不機嫌・怒り」を増大させ、「抑うつ・不安」の軽減には「きょうだい」からの「情動的サポート」が有効であることが明らかになった。

④-3 女児におけるストレス反応に影響を与える要因について(表16)

女児におけるストレス反応に影響を与える要因について検討するために、ストレス反応の各因子を基準変数とし、対処行動、情緒的サポート、情動的サポート別のサポート対象源を影響変数として、重回帰分析を行った。

その結果、ストレス反応の「不機嫌・怒り」

表15 男児におけるストレス反応についての重回帰分析

	標準偏回帰係数 (β)				
	ストレス計	身体反応	抑うつ・不安	不機嫌・怒り	無気力
対処行動					
回避	.007	-.006	.014	.188	.054
協力要請	.222+	.193	.252*	.333**	.115
情緒的援助	.112	.156	.109	.006	.051
個人主義	-.012	.065	.003	-.076	-.021
他者依存	-.118	-.100	-.178	-.097	-.015
積極的対処	-.085	-.030	-.133	-.095	-.099
情緒的サポート					
父	-.181	.000	-.169	-.271+	-.281+
母	.089	-.008	.007	.195	.083
きょうだい	.118	-.090	.297*	.101	.283+
友だち	-.028	-.007	.019	-.126	-.138
教師	-.006	-.002	.002	-.125	.103
情動的サポート					
父	.065	-.016	-.008	.080	.199
母	-.084	.125	-.087	-.126	-.158
きょうだい	-.209	.005	-.256*	-.148	-.267+
友だち	.040	-.035	.084	.081	.124
教師	.028	.087	.178	.010	-.061
R^2 説明率	.300	.277+	.400	.396	.313

* $p<.05$ ** $p<.01$ *** $p<.001$

表16 女児におけるストレス反応についての重回帰分析

	標準偏回帰係数 (β)				
	ストレス計	身体反応	抑うつ・不安	不機嫌・怒り	無気力
対処行動					
回避	.014	-.011	.044	.107	-.052
協力要請	.090	-.056	.064	.057	.106
情緒的援助	.164+	.149	.077	.158+	.179+
個人主義	.047	.035	.026	.075	.043
他者依存	-.228*	.183*	.249**	.129	.124
積極的対処	.022	.090	.132	.040	-.094
情緒的サポート					
父	-.194	-.077	-.174	-.063	-.375***
母	.121	.142	-.008	.049	.164
きょうだい	.115	.112	.142	-.039	.067
友だち	.122	-.094	.168	.040	.077
教師	-.257+	-.040	-.030	-.176	-.226+
情動的サポート					
父	.230+	.193	.010	.127	.335*
母	-.183	-.252+	-.039	-.046	-.290*
きょうだい	-.107	-.053	-.026	.049	-.097
友だち	.006	.120	-.063*	.032	.078
教師	-.081	-.042	-.097	-.164	-.023
R^2 説明率	.470**	.349	.435*	.400+	.464**

* $p<.05$ ** $p<.01$ *** $p<.001$

($R^2 = .400$)において、説明率が有意な傾向にあり、「ストレス総計」($R^2 = .470$)、「抑うつ・不安」($R^2 = .435$)および「無気力」($R^2 = .464$)において説明率が有意であった。ストレス反応の「身体反応」および「抑うつ・不安」では、対処行動「他者依存」との間に有意な偏相関が得られた(それぞれ、 $\beta = .183, p < .05$ 、 $\beta = .249, p < .01$)。「無気力」では、「父」からの情緒的サポート($\beta = -.375, p < .001$)、「父」および「母」からの情動的サポート(それぞれ、 $\beta = .335, p < .05$ 、 $\beta = -.290, p < .05$)との間に有意な偏相関が得られた。また、ストレスを軽減する傾向が見られたものとして、「ストレス総計」では、「教師」からの情動的サポートが有効であり、「身体反応」では「母」からの情動的サポートが有効であった。これらの結果から、女兒において、「他者依存」的対処行動はストレス反応を増大させ、ストレス反応「無気力」の軽減には、「父」からの情緒的サポートおよび「母」からの情動的サポートが有効であることが明らかになった。

4. 考察

本調査は、小学校3年生、5年生を対象として、Lazarus & Folkman (1984)によるストレスを捉えるシステム理論の実証的検討を目的に行った。すなわち、ストレスに影響を与える中心的な要因として挙げられる、ソーシャルサポート、対処行動とストレス反応との関連性を検討することが目的であった。

① ソーシャルサポートとストレス反応の関連性
 ソーシャルサポートとストレス反応の間の関連を検討したところ、男児と女兒においてソーシャルサポートがストレスに及ぼす効果が異なるという結果が得られた。

男児においては、ソーシャルサポートとストレス反応の間には、「父親からの情緒的サポート」とストレス反応の「不機嫌・怒り」の間に弱い負の相関係数が得られたのみであった。また、各ストレス反応を基準変数、ソーシャルサポートを説明変数とした重回帰分析においても、サポートによるストレスの軽減効果、増幅効果ともにほとんど認められなかった。

一方、女兒においては、ソーシャルサポートと

ストレス反応の間に負の相関係数が得られた。特に、「教師からの情緒的サポート」および「教師からの情動的サポート」は、ストレス得点を代表する「ストレス総計」との間に、どちらも負の相関係数が得られている。

また、「父からの情緒的サポート」や「父からの情動的サポート」、「母からの情緒的サポート」や「母からの情動的サポート」がストレス反応の下位尺度との間で、負の相関係数を示している。

つまり、教師や両親からのサポートが得られていると認知している者は、ストレスが弱く、教師、両親からのサポートのストレス軽減効果が認められたといえよう。言い換えると、女兒は他者に依存することによってストレスを軽減する傾向が高いが、男児はその傾向が低いといえる。これらの結果は、男女の性役割を反映していると考えられる。

久田(1987)によれば、サポート源や受け手の属性(性、年齢、社会経済的地位など)によってソーシャルサポートのストレス軽減効果が異なるという。サポート源や受け手の属性のなかでも性の要因は重要であり、例えば 配偶者間のサポートによるストレス軽減効果は、妻において強く見られるという報告も見られる。

岡安ら(1993)による、中学生を対象とした研究においても、ソーシャルサポートのストレス軽減効果は性差が大きいという結果が得られており、本研究において、小学生においても、同様の結果が認められたといえる。このように、女兒においてはサポートはストレスの軽減に有効であるといえるが、男児については認められない。つまり、性によって、ストレスの軽減に有効な要因が異なることが推測され、女兒におけるサポートのような、男児におけるストレス軽減要因の解明が今後の課題であろう。

② 対処行動とストレス反応の関連性

対処行動とストレス反応の関連を検討したところ、ストレスを軽減させる対処行動は得られず、増大させる対処行動として「社会的協力」や「情緒的援助希求」、「他者依存的対処」、「個人主義的対処」が得られた。

尾関ら(1990)によると、大学生を対象としたコーピング、ストレスの研究において、回避・逃避型コーピングがストレスを増大させ、情動型コー

ピングがストレスを軽減させることが報告されている。

本研究とは、対処行動を査定する尺度が同一ではないことから、直接比較はできないが、尾関らの情動型コーピングは、「ストレスから生じた自らの情動反応に焦点をあて、これを軽減するための積極的な対処行動」であった。これを本研究で使用したBISC項目と対応させると「社会的協力」、「情緒的援助希求」、「積極的対処」にあたる。つまり、尾関らの示す情動型コーピングを具体的に示していることになると考えられるが、児童にとっては、そのような情動型コーピングはストレスを増大させる結果となり、大学生の結果とは、一致しないことが明らかになった。

その理由として、子どもは、成人と比較して自己中心的なものであり、それゆえに、他者との関わりに配慮するというよりも、自己の感情や行動を優先させる傾向がある。つまり、子どもにとって、「社会的協力」や「情緒的支援」、「他者依存的对処」などの対処は、他者と接触が必要な対処であるために、それにともなったストレスが生じている可能性が考えられる。

次に個人主義的対処について概観してみよう。成人を対象とした研究においては、不安を軽減する対処として、向社会的対処が強く結びつくということが明らかになっている (Hobfoll et al, 1994)。しかし、子どもにおいては、そのような一貫した結果は得られておらず、逆に、反社会的対処が、子どもの統制感と不安を媒介する要因であるという結果が得られている (Lopez & Little, 1996)。

本研究においても、「個人主義的対処」が「ストレス反応」と正の相関が得られたことから、Lopez & Little (1995) によるコーピングの2次元モデル (図2参照) によって反社会的対処である個人主義的対処とストレスとの結びつきが、日本においても確認されたといえる。

③ ソーシャルサポート、対処行動、ストレス反応尺度の関連性

ソーシャルサポート、対処行動下位尺度、ストレス反応総計、3者の関連性を検討するため、相関係数を元に図3を作成した。その際、ソーシャルサポート、ストレス反応は合計得点を用いて、

対処行動との相関を示した。

ソーシャルサポートの合計得点と各対処行動は、図3の①に示すように、ソーシャルサポートと対処行動の「回避」および「他者依存」を除いた全てとの間に、関連性が得られた。自分の周りには「自分をサポートしてくれる人がいる」と認知している者は、「協力要請」、「情緒的援助希求」、「積極的対処」のような「向社会的-直接的」な対処をとることができるといえる。一方、「自分

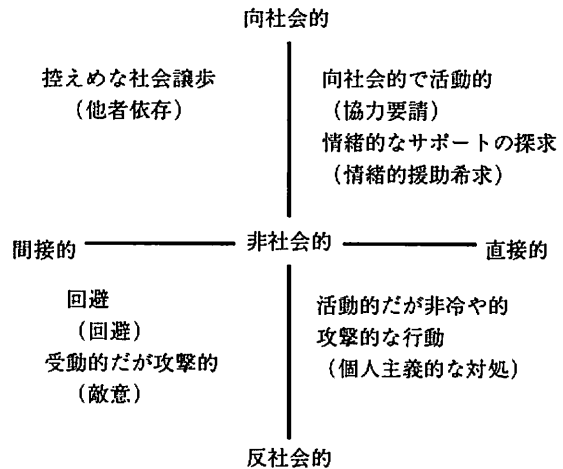


図2 BISCモデル

①	②	③
ソーシャルサポート	対処行動	ストレス反応
サポート総計		ストレス総計
	回避	.011
-.099	協力要請	.166***
.251***	情緒的援助希求	.188***
.155*	個人主義的対処	.108*
-.125*	他者依存的	.151**
-.070	積極的対処	.040
.226***		
		-.106
		情緒的 SS -.065
		情動的 SS -.127*

図3 ソーシャルサポート、対処行動、ストレス反応3要因の関連

*p<.05 **p<.01 ***p<.001

をサポートしてくれる人がいない」と認知している者は、「個人主義的対処」をとることが明らかになった。

嘉数ら（1998）の研究においても、本研究と同様に、ソーシャルサポートと対処行動の関連において、ソーシャルサポートと対処行動の「社会的協力」、「情緒的援助希求」、「積極的対処」の3方略との間に正の相関が得られている。「自分をサポートしてくれる人がいる」という認知は、向社会的な対処行動を促進していると推測することができる。

さらに、対処行動下位尺度とストレス反応総計は、図3の②に示すように、対処行動の「協力要請」、「情緒的援助希求」、「個人主義的対処」、「他者依存的対処」と「ストレス反応総計」との間に低いが、有意な正の相関が得られた。これは、嘉数ら（1998）の沖縄県の児童を対象とした結果と一部一致する。嘉数らの結果においては、「協力要請」および「情緒的援助希求」と「ストレス反応総計」の間にのみ有意な正の相関が得られている。

一方、中澤（1998）による千葉県の児童を対象とした研究においては、「積極的対処」とストレス反応との間に有意な負の相関が得られ、「積極的対処」がストレス軽減に有効であると報告されているが、本研究では「積極的対処」とストレス反応「抑うつ・不安」との間に、正の相関が得られ、地域によって、対処行動がストレス反応に及ぼす効果が異なる可能性が残された。

これらのことから、沖縄県の児童においては、対処行動とストレス反応との間の関連が正相関であるという点で先行研究との一致が見られ、対処行動が、ストレス反応を増幅させているということが分かる。

一方、ソーシャルサポートとストレス反応総計の関連性は、図3の③に示すように、関連が見られない。

以上をまとめると、ソーシャルサポートと対処行動間の関連性、結びつきの方が、ソーシャルサポートとストレス反応間の関連性、結びつきよりもより強いことから、対処行動が、ソーシャルサポートとストレス反応を媒介する要因として存在し、ソーシャルサポート→対処行動→ストレス反

応の流れをとらえることができる。

これらのことから、本研究の「ストレス反応表出までの先行条件であるソーシャルサポートと、ストレス反応の間には、媒介過程となる対処行動が存在する」という仮説が支持され、Lazarus & Folkman（1984）のストレスをとらえるシステム理論が支持された。

引用文献

- Hobfoll, S. E., Dunahoo, C. L., Ben-Porath, Y., & Monnier, J 1994. Gender and coping : T hederal-axis model of coping. *American Journal of Community psychology*, 22, 49-81.
- 久田 満・丹羽郁夫 1987 大学生の生活ストレス測定に関する研究 慶應義塾大学大学院社会学研究科紀要, 27, 45-55.
- 嘉数朝子・中澤 潤・井上 厚・當山りえ・島袋恒男 1997 児童の心理的ストレスとライフイベント→ストレスフルライフイベント尺度の地域比較分析を中心に— 琉球大学 教育学部附属教育実践教育指導センター紀要, 5, 73-80.
- 嘉数朝子・當山りえ・中澤 潤・井上 厚・Little, T. D. 1998 児童の心理的ストレスと対処行動、ソーシャルサポート、性格特性—日本語版BISCの作成と沖縄と千葉の比較研究— 琉球大学 教育学部附属教育実践教育指導センター紀要, 6, 73-94.
- Lazarus, R. S., & Folkman 1984 Stress, appraisal, and coping. New York : Springer
- Lopez, D. F. & Little, T. D. 1995 A Manual on the *Theoretical Development and Empirical Validation of the Behavioral Inventory of Strategic Control*
- Lopez, D. F. & Little, T. D. 1996 Children's action-control beliefs and emotional regulation in the social domain. *Developmental psychology*, 32, 299-323.
- 中澤 潤 1996 児童のストレスとライフイベント・社会的サポート・社会的問題解決 日本発達心理学会第7回発表論文集, 171.
- 岡安孝弘・嶋田洋徳・坂野雄二 1993 中学生におけるソーシャルサポートの学校ストレス軽減

- 効果 教育心理学研究, 41. 302-312.
- 尾関友佳子・原口雅浩・津田 彰 1990 大学生
の生活ストレス、コーピング、パーソナリ
ティーとストレス反応 健康心理学研究, 4-2,
- 1-9.
- 嶋田洋徳・戸ヶ崎秦子・坂野雄二 1994 小学生
用ストレス反応尺度の開発 健康心理学研究,
7-2, 46-58.